

令和4年度 第1回千葉県社会福祉審議会老人福祉専門分科会 開催結果

- 1 日 時：令和4年9月21日（水） 午後2時から午後3時30分まで
- 2 場 所：ホテルプラザ菜の花4階「楨」
- 3 出席委員（委員総数15名中10名出席）
石渡哲彦委員、榎本 豊委員、大河原伸浩委員、大坪紘子委員、小高陽一委員、
金江 清委員、境野みね子委員、田邊信行委員、林 房吉委員、藤野達也委員
（五十音順）
- 4 会議次第
 - (1) 開会
 - (2) あいさつ
 - (3) 委員紹介
 - (4) 事務局紹介
 - (5) 議題
 - ① 分科会会長代理の指名について
 - ② 千葉県生涯大学校マスタープランについて（諮問）
 - ③ その他
 - (6) 閉会
- 5 議事概要
 - (1) 分科会会長代理の指名について
須賀田委員を会長代理に指名した。
 - (2) 第3次千葉県生涯大学校マスタープランについて（諮問）
第3次千葉県生涯大学校マスタープラン骨子案について、配付資料に基づき事務局から説明した。
委員からの意見等は以下のとおり。
委員からの意見を踏まえて事務局において第3次マスタープランの原案を作成し、
次回の老人福祉専門分科会で報告することについて委員の了承を得た。

（委員）

仕事には定年があるが、一般の人で仕事を生涯現役でやっている人も結構いる。私もその一人。

自分の好きなことで老後を過ごしていきたい、その一方で、地域にも貢献出来ればということであるが、どんな仕事でも誰かの役に立っているものである。仕事をしながら生涯

大学校に入学して技術等を習得することもあると思うが、多分、生涯大学校で全てを習得するのはなかなか難しい。そこで、地域の人達、積極的に活動している人達に協力してもらって、その中で生涯大学校の卒業生が生きがいを感じながら活動してもらうというのは1つの方法だと思う。高齢者になってからの人生も長いので、年齢でなかなか活動できなくなってくることもある。全部自分一人で完結するのは難しいので、誰かを支えるというのではなく、一緒にやるという連携の仕方もあると思う。

シルバー人材センターを見ても、高齢になってくると、当然引き合いが来なくなってくる。100%できていたのが、50%や30%になってきてしまう。でも30%の力でも貢献はできる。高齢になってもできる範囲で活動する体制づくりや継続できる仕組みづくりを是非考えていただきたい。

健康づくり、生きがいについても、誰かが支えないと保てないもの。そういう活動が長く続けばいいのであって、生涯大学校の中で全部終結するのは難しい。卒業後もフォローできる体制、少しでも生きがいを持って地域活動を継続できるような状況を作っていただきたい。

高齢者が増えていく状況の中で、何らかの形で地域貢献できると思う。できれば地域活動の推進のため、生涯大学校にいるときにボランティアのことを総合的に学び、元気なうちは少しでも自分の意思で生きがいを感じて長生きして欲しいと思う。

100%の力でできないけど生きがいを持って生きていける状況、できれば地域と連携してやっていただくようお願いしたい。

(事務局)

お話しがあったとおり、生涯大学を卒業すればすぐ地域活動ができるかと言うと、そういうものではない。在学中にボランティアとの交流を行う等の実践的な授業内容を取り込んでいたり、コーディネーターに地域とのつながりを構築してもらおう等の取組によって、学んだことが生きるような形で運営していきたい。

(委員)

資格取得科目（赤十字救急法等）について。生涯大学校卒業生の人達が赤十字奉仕団に来て、一緒に勉強していきたい、ボランティアに参加したいという話をいただく。マスタープラン骨子案の中に「地域支え合いコース」とあるが、これに力を入れてもらえれば、赤十字奉仕団も高齢化が進んでいることもあり、生涯大学校の卒業生も一緒になって活動してくれることは、とてもいいこと。

独居高齢者への支援として、高齢者の方たちがどんなことを望んでいるのか、それに対

してどういう手だてをしたらいいかを考え、今まで試行錯誤をしながら活動してきた。このボランティア活動に生涯大学の卒業生が協力してくれること、活動に参加させてほしいという話をいろいろといただいており、赤十字の指導員の資格を持っている立場として感謝している。

いろいろな組織と横の連携をとりながらボランティア活動に向けて頑張っていければと思う。したがって、この生涯大学の見直しについてはもろ手を挙げて賛成したい。

(事務局)

生涯大学の卒業生が地域のボランティア活動に参加している事例があるのは、大変ありがたいことだと思っている。先ほど委員からも意見があったが、生涯大学校での2年間というのは限られた時間である。そこをきっかけにして、カリキュラムの内容だけではなくて、生涯大学校全体の取組として、地域活動やボランティア活動に結びつけていければと思っている。

(委員)

資料4、平成29、平成30年の見直しの部分に「市町村との連携の更なる充実」と記載がある。地域にこういう卒業生がいますよ、こういう学部を出てますよという情報を1回も聞いたことがない。長生村には生涯学習の団体が70団体くらいあるが、そういった団体のリーダー格になるのがこの卒業生であると思う。卒業生にリーダーになってもらい、いろいろなところで活躍してもらえと思う。シルバー人材センターでも同じである。

地域の卒業生の情報は個人情報になるのかもしれないが、本人の許可を得るなどして役場に情報をもらえれば、その方のところに出向き、団体のリーダーになってもらうよう頼むことができる。卒業生の情報が自治体にわかる様な方法をとってほしいと思う。

(事務局)

卒業生名簿に関しては個人情報になるかと思うが、地域でこういったニーズがあって、こういう卒業生がいるというマッチングはコーディネーターの役割でもあるので、これからも市町村や団体等と情報交換を密にして、より卒業生を地域に生かせるような形で還元していきたい。

(委員)

「情報」という発言があったが、高齢になると情報弱者になってしまうので、基礎科目に情報リテラシー的な内容を入れてはどうか。高齢者になると、例えばスマホの使い方や

ズーム、ラインとか使えるようになれば、情報を取得したり発信したりができる。情報を発信したり、集めたりすることで、行政とかボランティア団体との交流ができる。こういうところにボランティアがあるよとか、じゃあ行ってみようかな、というのがあと思うが、そういう情報が全くないと、なかなかそこに結びつかない。基礎科目の中に情報を使えるような科目が入るといいなと思う。

(事務局)

これからの高齢社会に向けて、高齢であるほどICTのツールを使えた方が本人にとっても利便性が非常に高く、生きがいを持って人とのつながりも維持しながら生活できる。基礎科目に導入することを検討したい。

(議長)

是非、基礎科目への導入を検討してもらおうと良い。

皆さんからの意見を聞くと、地域とのつながり、コーディネーターの役割が大事だと思う。その辺も検討してもらいたい。

(委員)

今、高齢化が進んでいる中で、すばらしい取組だと思う。ただ、カリキュラムの中に広報活動が入れば、卒業生が自分達で活動していくのではないかと思うが、どうか。広報が行き届いてないように思う。

卒業生自らが地域に対して活動の周知を行う。もしくは市町村と一緒に手伝うとか、そんなふうに皆で広げていくことが必要。現状では輪が小さいように思うので、輪を広げていくと参加者もどんどん増えると思う。

(議長)

広報活動は非常に大事。わかりやすく高齢者に伝える、デジタルの利用も含めて検討してはどうか。

(事務局)

確かにご指摘のとおり、卒業生の結束が比較的強く、非常にいい活動をやっている人がいるものの、あまり周知がされていないと感じている。卒業生だけで固まるというよりは、もっとその輪を広げていくような周知広報、卒業生団体やOB会だけではなく、県がやっていかなければならない部分もあるので、そういうところに力を入れていければと思う。

(委員)

要は、生涯大学の卒業生が卒業後にどういう活動ができるのか、どういう場に行けばどう活動できるのかということである。コーディネートをどうしていくかが一番肝心だろう。

これは生涯大学が全部やるのは無理なので、まず第一に、生涯大学でこのような形で地域活動ができますよ、こういう協力の仕方がありますよということを学んでもらう。次に、活動できる場の環境づくりというのは、いろんな福祉関係の施設はそれぞれの地域によって違うので、市町村なり行政に頑張ってもらいたい。ただ、先ほどから盛んに話が出ているが、コーディネーターがどのようにコーディネートしていくかについては、こういう形、こういう流れで地域で活かしますよということを、もう少し明確にしておいた方がいいのではないかと思う。

そうしないと、生涯大学で学んでも、先が不鮮明だと結局は学んだだけになってしまう可能性もある。せっかく生涯大学で学んだ力を存分に活かしてもらうには、コーディネートをどうするのか、各市町村、自治会あるいはボランティアに対し、こう進めていきますよというのをもう少し具体的に示すといいのではないか。

(議長)

コーディネートの非常に重要なポイントになる。

(事務局)

ご指摘の通り、学んだことを実際にどうつなげていくか。今でもコーディネーターは配置されているが、その役割をもう少し明確にする。あるいは県として、コーディネーターや現場に任せきりではなくて、行政のほうでしっかり頑張っていきたい。

県でも色々な関係課があって、そういう人材を必要としている部局がたくさんあるので、関係課と意思疎通をして繋げていけるようにしたい。

生涯大学の学生は非常に意欲がある方々が多い。生涯大学は人材を輩出する施設であるので、その受け手のところにどうつなげていくかということなので、県の方でもきちんと考えていきたい。その点については原案を作る中での宿題ということで、受け止めさせていきたい。

(委員)

大切なのは、マスタープランを県民の人にどうやって周知させるか。広報が一番大切だ

と感じる。何でもそうだが、意外と知らない人が多いのではないか。先ほど定員割れという話もあったが、入学する前にこういう活動があります、卒業後はこういう活動ができますということをきちんと周知すれば、もう少し変わるんじゃないかと思う。

(委員)

基礎科目の中に「防災」が入っているが、とてもいい反面、何でも入れると余計わかりにくい面もある。

地域に根付いた活動をするためには、自分の地域はどういう地域でどういう危険な部分があるのかとか、こういう事例があつてこういう活動があるというようなことを、地域ごとのカリキュラムに基づいて地域にあつた内容の講義など、基礎科目の中に位置付けると良いと思う。地域の事例などを学んで、活動に繋がるというケースも出てくるのではないか。

健康ということをテーマにするのであれば、具体的な地域の活動を紹介するなど、学生の動機づけになるようなリアルな内容を是非組み入れていただきたい。そういう興味から、じゃあこんな活動ができるかなと地域貢献に向かっていくのかなと思う。そのあたりを基礎科目を構成する際に意識していただきたい。

(委員)

先程、スマホの使い方などの話も出たが、時代に即したカリキュラムにしてはどうか。一見難しそうなことにも高齢者の知識・能力を使うような内容があつた方がいいのではないか。

(議長)

皆さん一人一人から貴重な意見をいただいた。本日各委員から出された意見を踏まえて事務局で第3次マスタープランの原案を取りまとめることとし、次回の分科会で報告させることでよろしいか。

【異議なし】

(議長)

以上で本日の議事を終了する。